

ジェネラリスト
土木技術者のための哲学・教養誌に向けて
～歴代の土木学会誌編集委員長を訪ねて～

東京工業大学・藤井 聡
(土木学会誌編集委員会幹事長)

歴代編集委員長に聞く

大正の土木学会黎明の時代から今日まで、土木学会誌（以下、学会誌）はその形を様々に変えてきた。その変遷は、本特集の「表紙デザインとレイアウトデザイン」にて丁寧にまとめられているところであるが、その変遷の“底流”として流れていたものを伺い知るには、それに携わった人々の語りに触れる以上の得策はなかろう。現編集委員会ではこうした思いから、学会誌の変遷の節目に編集委員長を務められた高橋裕先生（1974年～1977年委員長、国連大学顧問）、岡村甫先生（1988年～1990年委員長、現高知工科大学学長）、家田仁先生（2004年～2006年委員長、現東京大学教授）の三先生のお話を伺うこととした。各先生のお話はいずれも大変示唆に富む興味深いもので、本来ならいろいろな角度から紹介すべきところではあるが、今回はその中でも特に、学会誌の編集方針の変遷という視点から紹介させて頂くこととした。

「ジェネラリスト」のための学会誌

ここではまず、三先生の中でも特に、現在の編集委員会に最も直接に影響を与えて下さった先代の編集委員長・家田仁先生のお話を紹介するところからはじめたい。

ここ数年、学会誌の紙面のイメージは変わった、という印象をお持ちの方は、少なくともいのではないだろうか。カラーリングは以前にも増して豊かになり、読みやすさの重視から各記事の分量も随分とコンパクトになった。そして、従来の常識に必ずしもとらわれない多様な記事も多く掲載されるようになった。「学会誌は変わった」との印象をお持ちの読者がおられたなら、それは家田先生が手がけられた“変革”故である。

家田先生がそうした“変革”に取り組まれたのには、「土木技術者（土木屋）たるもの、ジェネラリストたらねばならない」という、お考えがあつてのことであつた——。土木屋にとって専門技術が必要であるのは当然である、しかし、過度に専門化し専門外のことは何も分からない、というのでは土木屋は務まらない、だからこそ土木屋はハードな技術的知識だけでなく、ソフトな情報も含めて多様な知識を携えなければならない、そうした多様性があつてはじめて良質なバランスが生まれる、こうした良質のバランスこそが良質の土木事業を生み出すために土木屋に求められている資質なのではないか、そして土木学会誌こそがそうした良質なバランスに資する多様な情報を提供する役割を担うべきなのではないか——。こうしたお考えから、家田先生は先に述べたような様々な形の“変革”を学会誌に加え、そして、今の学会誌のかたちを作られたのである。

土木技術者としての「教養」

家田委員長の時代から遡る事 16 年, 1988 年~1990 年にかけて編集委員長を務められたのが岡村甫先生であった。岡村先生は家田先生が行った各種の変革のベースとなる大きな転換を学会誌にもたらした。それは、学会誌の“カラー化”である。ここでは、その背景について伺ったお話を紹介することとしよう。

岡村先生は委員長就任時にまず、「原点に立ち返る」という検討をされ、その中で改めて「学会誌と論文集（土木学会論文集）との役割分担」に着目されたのであった。その両者の相対的な役割を考えた時、学会誌には専門的情報というよりはむしろ「技術者としての教養」に資する情報発信を担うという役割があるのではないかと考えられた。これを受け、論文集は“保存”すべき技術・学術資料として出版される一方で、速報性と多様性を重んじる学会誌は必ずしも長期に保存されることを目途としない“土木技術者のための教養誌”として作られていくことになったのである。

この認識の下、岡村委員長は当時の三木千寿幹事長（現東京工業大学副学長）と共に、ヴィジュアルを重視したカラーページを導入しつつ、速報性と多様性を重視した紙面作りに大きく舵を切ったのである。この方針転換は、当時の日本においてカラー学会誌を持つ学会がどこにも見られなかったこともあって、一部から「フライデー／フォーカス化」とも揶揄されたらしいが、今となっては隔世の感を禁じ得ない。言うまでもなく、このカラー導入によって学会誌と論文集の境界はより明確なものとなったのであった。

なお、岡村先生はこの時代、体裁だけでなく、その内容にも大幅な改変を加えられている。上記のように速報性ある特集を組む一方で、土木学会が正面から取り組むべき「骨太」な特集を折りに触れて取り上げると共に、基礎的な土木知識や様々な意見や主張を多面的に掲載し、技術者の“教養”に資す誌面づくりを目指したのであった。

「哲学」

岡村先生の時代からさらに遡る事 14 年, 1974 年~1977 年にかけて編集委員長を務められたのが、高橋裕先生であった。高橋先生曰く、近年の土木学会誌には三つの大きな節目が挙げられるとのことであった。そのうちの二つが、上述の家田先生と岡村先生の変革期であり、残りの一つが、高橋先生が委員・幹事を務められていた故八十島先生（1962 年~1965 年委員長）が委員長の時代であった。

論文集は、今を遡ること 51 年前の 1956 年に、学会誌内の技術論文を取りまとめるという形で、学会誌からの「独立」を果たした。しかし、論文集の独立以後十年前後、論文集と学会誌との区別は判然としたものではなく、学会誌にも論文集に掲載するような技術論文が数多く掲載されていた。しかし、八十島・高橋両先生は、学会誌と論文集が分離した以上は、学会誌には独自の役割を担うべしと考えた。そして、論文集は技術の深化という求心的な媒体と考えるのなら、学会誌は開かれた媒体としての役割があるのではないかと議論となった。すなわち、高橋先生の言葉をお借りするなら、学会誌は「哲学」を発

信し、それを通じて「土木学会を引っ張り、土木界を引っ張り、技術界を引っ張り、そして、世論を引っ張る」という役割があるのではないかとお考えになったのである。

こうした考え方の下、八十島委員長の時代から高橋委員長の時代にかけて、時宜を得たテーマを主体とした特集を中心とした「雑誌づくり」へと転換していった。そして、活字を減らして写真や図を増やすことで読みやすさの向上を図ると共に、司馬遼太郎先生をはじめとする各界著名人との対談を掲載する等、現在の学会誌のかたちへと繋がる大きな方向転換がなされたのであった。

学会誌史を流れる一つの潮流

以上の三先生のお話を伺えば伺う程、各時代で独自のご努力をなしてこられたことについて敬服せずにはいられない。それと同時に、過去数十年の学会誌づくりの根底に脈々と流れる一つの潮流をおぼろげ臆気^{おぼろげ}に感じ得たようにも思う。その潮流はやはり、論文集が学会誌と分離したという事実を源流としているように思う。先生方のお言葉をお借りするなら、その潮流とはすなわち、専門的な土木技術に関する原稿を掲載する「論文集」というよりはむしろ、ジェネラリストたる土木技術者の教養と哲学を、土木学会全体に、そしてひいてはその背後にある社会全体に発信し続ける雑誌媒体こそが「学会誌」なのだ、という気概だったのではないかと思えるのである――。

追記：冒頭でも触れたとおり先生方のお話はいずれも示唆に富むものであり、また、今回お話を伺えなかった歴代編集委員長の方々にも是非お話を伺いたいとの意を改めて強くした。紙面の都合から十分にお伝えできないのが誠に残念なところであるが、これまで学会誌に携わってこられた方々がその中で何を思い、何を為してこられたのかの一端だけでもお伝えしたいとも重いから、稚拙ながらも上稿させて頂いた。最後に、本企画にご賛同頂き、貴重なお時間を割いて下さった高橋裕先生、岡村甫先生、家田仁先生に改めて深謝の意を表する次第である。